

地場産業都市の政治構造

—— 愛媛県今治市の戦後地方政治(1) ——

市 川 虎 彦

1 愛媛県今治市の特性

今治市は、愛媛県東部に位置する都市である。1920年（大正9年）2月に、今治町と日吉村が合併して市制が施行され、今治市が発足した。この時、面積は8.01km²、人口は30,295人であった。1933年に近見村を、1938年に立花村をそれぞれ合併し、1955年の大合併で周辺の波止浜町・桜井町・乃万村・日高村・清水村・富田村の6町村を編入した。人口は96,654人、面積は74.30km²に、それぞれ増大した。以後、半世紀にわたってこの市域が維持された。「平成の大合併」とよばれる国の市町村合併推進策が進められる中、2005年1月16日に、朝倉村・玉川町・波方町・大西町・菊間町・吉海町・宮窪町・伯方町・上浦町・大三島町・関前村の11町村を編入する文字通りの大合併が行われ、新今治市が誕生した。面積は419.6km²になり、以前の6倍近くにまで膨張した。人口は180,627人となった。

1955年以降、市の人口は順調に増加を続け、1985年に12万5千人を超えて頂点に達する（国勢調査）。以後、人口は減少に転じ、1996年には12万人を割り込んだ。その後も減少を続け、2003年で11万7千人台にまで落ち込んでいる。

今治市は、タオル製造業と造船業が主力産業の都市である¹⁾。タオル製造の端緒は明治期にさかのぼり、大正期には需要の増加にともない主要産地の地位を確立した。第2次世界大戦の戦災によっていったん壊滅した今治のタオル産業

表1 今治市の人口およびタオル製造業

西暦	人口	タオル企業数	従業員数
1955	96,654	157	
1960	100,082	170	
1965	104,470	309	9,051
1970	111,125	333	9,665
1975	119,726	497	8,215
1980	123,234	481	7,073
1985	125,115	437	6,474
1990	123,114	390	6,533
1995	120,214	284	5,583
2000	117,931	219	4,237

(出所)『今治市の統計』および四国タオル工業組合調べ

は、戦後すぐさま復興し、朝鮮戦争時には「糸へん景気」とよばれる好況を享受した。1960年には大阪府をぬいて、タオル生産量第1位を誇るようになる。また、もう一つの地場産業である波止浜地区の造船業は、この地が瀬戸内海の内海運の一つの中心であったところに起源があるとされている。

こうした地場産業中心の工業都市である今治市は、合併した1955年から、60年代、70年代にかけて、県内では新居浜市・松山市に次ぐ3番目の製造品出荷額をもつ都市であった。しかし80年代に入ると、紙・パルプ産業が集積する伊予三島市、臨海工業地域に工場進出がつづく西条市に、製造品出荷額で相次いでぬかれてしまう。人口規模でいうと、西条市は今治市の半分以下、伊予三島市は3分の1以下であった。今治市は、90年代は県内で5番手の工業都市という位置に甘んじていた。さらに2000年には、川之江市および郡部の菊間町（石油化学工場が立地している）にまで、製造品出荷額で追い抜かれるに至る（[表2]参照）。

そうした2000年の時点でみても、タオル産業を中心とした「衣服」部門が、今治市の製造品出荷額の約3分の1を占め、製造業の中心であったことがわか

表2 愛媛県下12市および製造品出荷額上位3町の2000年の製造品出荷額および人口

	工業出荷額(百万円)	人口	主要産業	
松山市	491,785	473,379	一般機械	化学
新居浜市	481,152	125,537	化学	非鉄金属
西条市	389,015	58,110	電気機械	非鉄金属
伊予三島市	343,477	36,832	パルプ	プラスチック
川之江市	206,632	38,126	パルプ	繊維
今治市	198,795	117,930	衣服	輸送機械
東予市	123,168	32,993	金属	一般機械
伊予市	106,439	30,547	食料	プラスチック
大洲市	74,468	39,011	電気機械	食料
宇和島市	31,457	62,126	食料	電気機械
北条市	23,085	28,547	一般機械	繊維
八幡浜市	17,312	33,285	食料	輸送機械
菊間町	232,949	7,651	石油・石炭	窯業
川内町	132,572	11,043	電気機械	食料
一本松町	131,410	4,256	電気機械	窯業

(出所)『愛媛の工業』および『統計でみる愛媛のすがた』より作成

表3 今治市の主要業種(2000年)

	製造品出荷額 [万円](%)	事業所数	従業者数 [人]
今治市合計	19,879,456 (100.0)	821	10,072
衣服	6,423,773 (32.3)	327	3,762
輸送機械	4,534,743 (22.8)	23	691
電気機械	2,762,683 (13.9)	7	1,029
食料	2,220,517 (11.2)	66	1,106
繊維	1,401,268 (7.0)	146	1,518
出版	551,802 (2.8)	28	443
窯業	538,244 (2.7)	16	171
金属	394,990 (2.0)	55	355

(出所)『愛媛の工業』より作成

る（[表3] 参照）。また、「衣服」「繊維」といった業種は事業所数が非常に多く、今治市の製造業が中小零細の企業によって担われていることがわかる。もう一つの地場産業である造船業が、製造品出荷額で第2位を占め（輸送機械）、やはり市内で重要な産業となっていることを示している。

しかし、経済のグローバル化の進展は、今治の主力地場産業であるタオル製造業に深刻な打撃を与えている。安価な中国製の製品が日本市場に流れ込んでくるようになるにつれ、タオル製造業者の転廃業が相次ぐようになった。[表4] に示されるとおり、製造品出荷額でみると1994年からの8年間で「衣服」はほぼ半減している。連動して「繊維」も出荷額の構成比をほぼ半減させている。「衣服」の出荷額は、ついに2002年には「輸送機械」にわずかではあるが遅れをとり、首位の座をすべりおちた。

産業別就業者人口をみると、敗戦後まもない1950年で今治市の第2次産業就業者数は30%を超えていた。1960年には40%に近づく。このように今治市は、早くからタオル・造船といった地場産業を中心とした工業都市という性格をもっていた。しかし1990年代以降、タオル産業の衰退と相まって、第2次産業就業者の比率は低下傾向をはっきりと示すようになる。

表4 今治市の業種別製造品出荷額の推移（1994—2002年）

	1994年製造品出荷額[万円](%)	2002年製造品出荷額[万円](%)
今治市合計	24,125,240 (100.0)	19,109,881 (100.0)
衣 服	9,868,103 (40.9)	5,107,243 (26.7)
輸 送 機 械	5,325,837 (22.1)	5,219,383 (27.3)
繊 維	2,585,451 (10.7)	1,058,896 (5.5)
食 料	2,012,031 (8.3)	2,386,388 (12.5)
電 気 機 械	1,474,229 (6.1)	3,126,140 (16.4)
金 属	557,512 (2.3)	388,447 (2.0)
出 版	511,383 (2.1)	554,593 (2.9)
窯 業	281,212 (1.2)	465,598 (2.4)

(出所)『今治市の統計』より作成

表5 今治市の産業別就業者比率の推移 (%)

	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年
第1次産業	33.0	20.1	11.7	6.4	4.4	3.4
第2次産業	31.9	39.7	43.5	40.0	39.4	34.9
第3次産業	35.1	40.2	44.8	53.6	56.1	61.7

(出所)『今治市の統計』より作成

このように今治市は、古くからの地場産業中心の都市として、また愛媛県東部の中心都市という位置に存在してきた。こういった都市の政治構造がどのようなものか、どういった特徴を有するのか、以下において資料にもとづき、歴史を追いながらあきらかにしていきたい。そこでまず、今治市がふくまれる衆院愛媛2区の政治状況を通覧することにする。それから今治市長選をめぐる歴史的な経緯をたどることによって、前述の目的にせまっていくこととする。

- 1) 今治の産業および経済については、鈴木茂「国際化と地場産業都市」『産業文化都市の創造』松山大学総合研究所、1998、所収を参照。

2 戦後今治市の政治状況

愛媛県は伝統的に東部(通称「東予」)、中部(同「中予」)、西部(同「南予」)の三つの地域に区分される。それぞれが、中選挙区制時代の衆院選挙区の愛媛2区、同1区、同3区に対応している。いずれの選挙区も定数は3である。このため、1955年の社会党統一と保守合同による自由民主党結党以後、この両党以外の政党が愛媛県内の選挙区で議席を獲得することは非常に困難であった。

1958年から1983年まで10回の総選挙では、1区で民社党(中村時雄)が2度、議席を獲得した他は、県内のすべての議席を自社両党でわけあってきた。例外の民社党議員も、社会党から民社党が分裂する前は、社会党公認で3回の

衆院当選の実績をもっていた。1986年以降は、都市化の進む1区で社会党の議席維持が次第に困難になり、公明党と日本新党が、それぞれ1度ずつ議席を獲得している。2区・3区では、1958年以降自社以外の政党の議席獲得は皆無であった。両選挙区では、いわゆる「55年体制」が、定数3という事情も後押しし、堅固に持続してきたといえる。

愛媛県は、県民自身も「保守王国」と自認するような自民党の勢力の強い地域である。55年体制成立後、最初の総選挙があった1958年から中選挙区制での最後の衆院選となった1993年まで、13回の総選挙が行われた。自民党の選挙実績をみると（保守系無所属で立候補・当選後自民党入党を含む）、県内9議席中8議席を獲得したのが最高で、2度ある。7議席獲得が7度、6議席獲得に終わったことが3度、最低は5議席で1963年に1度だけある。自民党がたしかに好成績を収めてきたことが数字からうかがえる。しかし、今から考えてみると、定数3の中選挙区制下において、自民党以上の恩恵を受けていたのは社会党だったともいえる。定数3のため、60年代以降の多党化の流れから守られ、野党第一党という立場を最大限に生かし、各選挙区で1議席をねらえる位置を維持し続けることができたといえる。

今治市が含まれる愛媛2区をしてみると、3議席が自民2・社会1に配分され、指定席になるような無風状態の選挙はなかった。保守系の有力候補3～4名に社会党候補を加えた4～5名で3議席を争う熾烈な選挙戦がつねに行われ

表6 愛媛県内の衆院選挙の党派別獲得議席数（1958～1993年）

(西暦)	58	60	63	67	69	72	76	79	80	83	86	90	93
自民党	8	7	5	8	7	7	7	7	6	6	7	6	7
社会党	1	2	3	0	2	2	2	2	3	3	1	3	1
民社党			1	1	0	0							
公明党					0		0				1	0	
日本新党													1

(注) 自民党には当選後入党を含む

てきた。定数を満たすか、時には超える数の保守系候補者が必ず立候補してきたところに、愛媛2区が激戦区となった要因がある。愛媛1区は、1970年代後半から関谷勝嗣（自民党）・塩崎潤（自民党）を軸にした安定期が、それより少し遅れて3区にも西田司（自民党）・今井勇（自民党）・田中恒利（社会党）の3人による安定期が生まれた。2区には、そのような安定、あるいは無風の時期は、ついで訪れることがなかった。

保守系の候補者をみてみると、1952年に戦前に代議士だった砂田重政が復帰したことにより、県議（越智郡選出1期）出身の越智茂、それから村瀬武男（衆院議員－今治市長）の甥にあたる村瀬宜親の三者が対峙する時代が50年代に到来する。この中で、保守の大物である砂田も落選の苦渋をなめることを経験した。1957年、三者のうち越智、砂田が衆院議員の任期中に相次いで死去した。越智の後継には、越智と姻戚関係にもある県議（宇摩郡選出2期、伊予三島市選出1期）の井原岸高が決まった。また砂田の後継は、砂田の親類でもある県議（越智郡選出1期、今治市選出1期）の八木徹雄となった。これを契機に、砂田・越智・村瀬時代から八木・井原・村瀬時代へと推移した。井原は、愛媛2区の最も東側に位置する香川県境の宇摩地方を地盤としたため、今治市内での得票は2千～3千票にとどまった。そのため、八木・井原・村瀬の鼎立時代には、今治市内の保守票は八木と村瀬でほぼ分けあう形になった。

村瀬が1960年、63年の総選挙で連続して落選し引退すると、67年総選挙から官僚出身の村上信二郎が今治・越智地方を地盤に議席を獲得するようになる。今治の保守票は、今度は八木・村上に二分された。ところが1971年に八木が、翌72年に村上が衆院議員任期中に死去してしまう。八木の後継として、八木派県議（今治選出4期）の越智伊平が72年10月の補選に出馬し当選する。その2か月後の総選挙には、新居浜を地盤とする官僚出身の森清が無所属から出馬した（結果は落選）。これ以後、愛媛2区の保守系候補者は、井原・越智・森の三者の時代へと推移する。この三者の中で、唯一の今治出身候補者となった越智伊平は今治市内において他を圧する票を獲得した。また、2区全体でみ

ても越智の選挙の強さは際立っており、中選挙区制において補選も入れて連続9回当選し、激戦区愛媛2区で落選を一度も経験しなかった。また、補選を除いた8回の総選挙でトップ当選6回という群をぬいた戦績を示した。

1983年の総選挙は、愛媛2区の一つの転機となった。この選挙でそれまで8回当選（総選挙6回、補選2回）の井原岸高が、2回連続落選となり引退をきめた。一方、次点に村上信二郎の実子で議員秘書をしていた村上誠一郎が入った。以後、越智・村上・森一小野¹⁾の時代になった。越智と村上は地盤が重なり合い、今治市内の保守票は二人の候補者によって二分される時代にもどった。

このように保守系有力候補者たちが、激しい角逐をくりひろげる愛媛2区において、社会党候補は戦後18回行われた中選挙区制による衆院選挙で議席を13回確保した。中選挙区による戦後最初の総選挙で赤松明勅が、その後安平鹿一が4回、藤田高敏が8回の当選を重ねた。その他に、1958年の補選で羽藤栄一（後の今治市長）が当選している。

2区では、大規模工場が立地し、その労働組合を抱える新居浜・西条地区が社会党の強い地域で、中小の地場産業中心の今治市には社会党は強い基盤をもたなかった。安平は、今治市内でせいぜい2千票から4千票の得票にとどまった。1963年の総選挙から、実に30年以上にわたって保守系候補者たちの好敵手として2区でわたりあった藤田は、衆院選立候補前は、西条市選出の県議（4期）であった。藤田も初当選した1963年の総選挙では、今治市内の獲得票数が4千票あまりであった。しかし、当選を重ねる度に今治市内にも浸透し、1970年代後半からは1万票前後の票を今治で得ることができるようになった。1990年の総選挙では、全国的に社会党ブーム、マドンナ・ブームが起り、藤田も旧愛媛2区の史上最高得票である9万6千票でトップ当選し、今治市内でも1万6千もの票を得た。この例外を除けば、藤田が今治で獲得した票は、保守系候補たちが獲得した票の合計の4分の1から5分の1にとどまっていた。

愛媛2区における共産党はふるわず、その候補者たちは当選圏に遠く及ばずにきた。今治市内の得票状況についても同様である。公明党にいたっては、候

補者を擁立したことが1回あるだけである。また、新自由クラブ、日本新党、新生党、新党さきがけのような新党が愛媛2区に候補者を擁立することもなかった。

1996年の総選挙から選挙制度改革により小選挙区比例代表並立制が導入された。定数3の選挙区が三つあった愛媛県は、定数1の小選挙区4つに再編された。今治市と越智郡は旧愛媛2区から切り離され、松山市とともに旧1区を構成していた北条市・温泉郡・上浮穴郡・伊予郡・伊予市²⁾と合併され、県庁所在地の松山市を半円形に包囲するような変則的な新愛媛2区に含まれることになった。

選挙制度改革時に、愛媛2区の議席は自民党が3議席独占していた。このうち、今治市・越智郡を地盤とする村上誠一郎が、両地域が含まれる新2区から立候補することになる。新居浜を地盤とする小野晋也が新3区からの立候補となり、閣僚経験をもつ長老格の越智伊平が比例代表四国ブロックの名簿上位にまわることで調整がついた。

小選挙区制の導入は、愛媛の衆院選挙に劇的な効果をもたらした。新制度の下で行われた3回の総選挙で、4議席すべてを自民党が独占しつづけることになる。新選挙制度は、四国を自民党の金城湯池としたが、とりわけ愛媛ではその傾向が顕著である。新2区においても村上誠一郎が圧倒的な強さで3回の当選を重ねた。1996年の総選挙では、他の愛媛1区、3区、4区で候補者擁立がみられた新進党も、2区では立候補者がいなかった。2000年総選挙では、1区、3区で民主党からの立候補があったが、2区ではなかった。2003年に、はじめて民主党が2区で候補者を擁立した。愛媛2区で、自民党・社会党・共産党以外の政党からの立候補者がでたのは、1976年の公明党以来である。この時の村上の得票は、次点となった民主党候補の倍以上であった。小選挙区制の導入は、愛媛2区を激戦区から一転して無風区に変えてしまう効果ももたらした。

表7 衆議院愛媛2区の主要立候補者の得票順位(55年体制成立以後～中選挙区終了時)

(西暦)	補	58	60	63	67	69	補	72	76	79	80	83	86	90	93
[自民党系]															
八木 徹雄		4	3	2	2	2	3								
越智 伊平								1	1	1	1	3	1	1	2
村瀬 宣親	3	1	4	4											
村上信二郎						1	2								
村上誠一郎													4	2	3
森 清								4	2	4	2	3	3		
小野 晋也														4	3
井原 岸高	2	2	3	3	3	4	2	2	4	2	4	5			
池田 伸								5							
[社会党・民社党]															
安平 鹿一	—	5	1												
藤田 高敏				1	4	1	—	3	3	3	1	2	4	1	4
羽藤 栄一	1	4	5												
曾我部正雄				5											
共 産 党	5	6	6	6	5	5	4	6	6	5	5	6	5	5	5
公 明 党									5						

(注)「補」は補欠選挙

- 1) 90年総選挙で、森から新居浜選出の県議(2期)だった小野晋也に代替わりした。
- 2) ただし伊予郡・伊予市は、定数は正措置の一環として1986年の総選挙より、愛媛1区から愛媛3区に編入されていた。

3 今 治 市 長 選

今治市では、第2次世界大戦末期から敗戦直後まで(1943年12月～1946年3月)、沼田恒夫が市長を勤めていた。もともと大洲出身の沼田は、戦時下に前市長(阿部秀太郎)から請われて、県庁より今治市助役にむかえいられていた。敗戦後、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の政令第3号によって

市長を離職するに至る。その後任として1946年7月から市長に就任したのが森秀夫である。森は、今治市内の生まれであるが、この当時、朝鮮から引き揚げてきていたところであった。

1947年4月5日、初めての市長の公選が行われた。この選挙は、現職の森秀夫（無所属）の他に、越智直三郎（愛媛民主党）、木原主計（社会党）が立候補し、あわせて3名の候補によって争われた。越智直三郎は戦時中からの県議であった。1946年1月、GHQは第1次公職追放を行い、さらに同年11月には追放が地方公職に対して広範に適用されることを公表した。これを受けた12月の通常県会において、県議33名（定数38、欠員5）のうち22名が自発的に辞職した。この時、越智は県会に残り、県会議長に就任した。越智の属した愛媛民主党という政党は、1947年に予定される各種の選挙をにらんで、46年11月に南予（愛媛県西部）の保守系政治家たちによって立ち上げられた地方政党である。さらに全県的な保守勢力の糾合をめざし、47年1月に松山で発会式が行われた。県会議長だった越智は愛媛民主党幹事長に就任した。こうして越智は、4月の今治市長選に臨んだのである。結果は現職市長である森が大差の勝利を収めた。敗れた2人のうち木原は、1951年以降、県議を通算2期務めている。初の公選市長として今治の戦後復興にあたった森であったが、過労により翌年9月には市長職を辞している。

森の後任には、助役であった山本幸助が無投票で就任した（1948年11月）。今治市は、大戦中、アメリカ軍の空襲を受け、生産設備に多大な損害を被っていた。1948年の市別の工業出荷額をみると、新居浜市51億円、西条市12億円に次いで、今治市は9億円で第3位だった。しかし、その後「糸へん景気」の中、特に綿布・タオル業の復興が進み、1950年には、西条市を工業出荷額で抜き、新居浜市64億円に次いで、26億円で県内第2位となった。

1952年10月の市長選は、現職の山本と村瀬武男との間で争われた。村瀬は、旧大西町出身で、大井村助役（1902年〔明治35年〕就任）、大井村村長（1910年〔明治43年〕就任、在任32年）を歴任した。1919年〔大正8年〕には、

越智郡から選出されて県会議員となり、その後当選5回を重ね県会議長まで務めた。さらに1937年4月の衆議院選挙で、民政党から愛媛2区に立候補し初当選をかざった。1943年4月の衆院選では、大政翼賛会推薦で2度目の当選を果たした。翼賛選挙における推薦議員は全員が公職追放の対象となり、村瀬も追放の指定を受けた。しかし、1951年には追放解除がなされていた。選挙戦の序盤は山本優勢が伝えられたが、選挙経験をもたない山本に対して、前記のような経歴をもつ村瀬が73歳（1879年生）の高齢にもかかわらず、山本をかわして今治市長選初当選を果たした。しかし、1年後には病気（心臓喘息）のため辞任するに至った（1953年12月20日付）。

1954年1月に村瀬辞任をうけた市長選が行われた。立候補したのは、今治市議2期の田坂敬三郎、元代議士（進歩党）の稲本早苗¹⁾、山沢和三郎、共産党の福島照一の4人であった。田坂は、戦時下の今治市会議長だった田坂庄三郎（空襲で死亡）の三男である。今治市議の2期目にはやくも副議長を経験していた。稲本は自由党の推薦を受け、愛媛2区選出の自由党衆院議員である越智茂や今治選出の自由党県議の野間房義の応援の他、市議16名が推していた。山沢は、戦前は朝鮮半島の行政にたずさわり、慶尚南道知事を務めた。敗戦後は、配偶者の出身地である今治で弁護士業を開業していた。山沢は改進黨および社会党の支援を受けての立候補だった。

稲本を推す自由党陣営は候補者選びが遅れたことから、その組織力を生かし切ることができなかった。選挙戦当初は、山沢が最有力との下馬評もあったが、改進黨・左派社会党の政党色やイデオロギーがかえって集票の妨げになったといわれる。逆に、政党色のなかった田坂が浮動票をつかんだとされる。また、地元出身の市長を望む市民の声も、田坂に有利に働いたと考えられる。その結果、田坂が2位の稲本に6千票以上の差をつけて当選した。42歳の若き市長の誕生となった。

これより前、1953年9月に町村合併促進法が公布されており、今治市も周辺の桜井町、富田村、清水村、日高村、乃万村、波止浜町と合併促進協議会を

つくり、1955年2月1日に上記の町村を編入合併した。これにより人口96,654人、面積74.3km²の新今治市が誕生した。この市域は2005年1月の大合併まで保たれることになる。1957年9月には、市庁舎および公会堂の建築に着工した。

1958年1月の市長選では、田坂以外の立候補者がなく、無投票で田坂が再選された。田坂は継続して事業の推進にあたった。

田坂は、1962年1月の市長選において3選をめざした。当初、田坂の他には共産党の石原吉久の立候補が予定されているだけであった。ところが1月に入ってから、突如羽藤栄市が立候補を表明し、選挙戦は田坂－羽藤の事実上の一騎打ちの様相になった。

羽藤は今治市桜井出身で通信省に入省、1942年に南方総軍司政官、1949年に四国電気通信局長に就いた。1951年、保守分裂の間隙について、社会党・民主党推薦の久松定武が愛媛県知事に当選すると、羽藤は社会党から推されて副知事に就任した²⁾。しかし1953年、自由党によって県議会に議員提案された「副知事をおかない条例」によって、羽藤は最終的に副知事辞任へと追い込まれる。1955年の県知事選は、革新から保守へ転身した現職の久松と社会党推薦の羽藤との一騎打ちになった。ここで羽藤は、久松に完敗する³⁾。その後羽藤は、1958年2月の衆院愛媛2区の補欠選挙において社会党から立候補し、初当選を果たした。しかし、同年5月の総選挙では次点で落選。1960年11月の総選挙は民社党より立候補したが、再び落選の憂き目をみた。62年の今治市長選は、こうした政治経歴の羽藤にとって政治生命がかかった背水の陣だった。

この市長選において羽藤は、民社党を中心とする革新系と、自民党代議士の井原岸高派および落選中の前衆院議員の村瀬宜親派、それに反田坂の市議たちにも推され、公示直前の立候補に至った。今治選出の自民党県議のうち村瀬系の山本博通も、羽藤支持にまわった。羽藤の選挙戦の陣容は、革新系、井原派、村瀬派の「三派連合軍」と称された。一方の田坂は、八木徹雄衆院議員－越智

伊平県議－越智明市議会議長のいわゆる「八木派ライン」の支援をうけて選挙戦にのぞんだ。県議会自民党は、自民党県議の越智、山本が対立状態におちいったことから調整に乗り出すが、結局失敗し、越智・山本以外の県議は今治市長選に参与しないことを決めた。こうした中、当初は現職の強みで田坂優勢が伝えられもしたが、結果は接戦を制しての羽藤初当選だった。浮動票が羽藤に流れたことと、知事選、衆院選の落選に対する同情票もあったといわれている。

革新出身の羽藤は、市長当選後、自民党友となり保守系市議の支持を得た上で、1966年1月の市長選で再選を目指した。対する社会党、民社党陣営は候補擁立を見送り、対立候補としては共産党の徳丸俊晴、保守系の田窪利一が立候補した。しかし、圧倒的な大差での羽藤再選となった。選挙戦は低調で、投票率は過去最低の61%にまで落ち込んだ。

1970年の選挙は、前回とは一転して激戦模様になった。当初は、現職の羽藤に、共産党の内山正二、ホテル会社経営の村上敏郎の出馬が予想されていた。村上は、越智郡選出の県議5期（社会党－民社党）の実績をもっていた。そこに公示2か月前になって、自民党県議の山本博通が立候補を表明した。山本は、今治市議2期、県議4期の経歴をもち、県議会議長も経験していた。保守系3候補の立候補表明を受けて、自民党県連は調停工作に乗り出した。県連は公示直前に山本推薦を決めるが、羽藤、村上ともに無所属で立候補した。その結果、今治の自民党市議団および経済界が相分かれる選挙戦となった。

2区選出の自民党代議士八木徹雄、村上信二郎は、この市長選に積極的に関与することはなかったといわれている。一方で、久松県知事や自民党県議団は山本の応援に動き、山本は「県政直結の市政」を看板に掲げた。現職の羽藤は「市民のための市政」を、村上は「『道義市政』の確立」をそれぞれ訴え、山本に対抗した。

結果的には、羽藤が意外な大差で3選目を決めた。羽藤の勝因としては、現職の強み、選挙態勢の整備、革新系の支持獲得などが挙げられている。逆に山本の敗因としては、選挙準備の遅れに加えて、知事、県議の応援がかえって市

民の不興をかったことなどが指摘されている。

1974年の市長選は、現職の羽藤と共産党の内山正二が争った。前回の市長選に出馬した山本は再挑戦が噂されたが断念した。一方、革新陣営では社共共闘が形成されなかった。そのため、羽藤が大差で4選された。

1977年の年末は、造船不況が今治を襲った。今治ではタオル産業とならぶ有力な地場産業である造船業だが、深刻な危機が訪れていた。こうして、波止浜造船倒産の衝撃が走る中での市長選ということになった。しかし立候補者は、現職の羽藤と共産党の内山という、前回とまったく同じ顔ぶれであった。市民の関心は低く、投票率は51.5%にまで落ち込み、最低記録を更新した。結果は、羽藤が順当に5回目の当選をとげた。

羽藤は、60年代から70年代にかけて、通算20年の長きにわたって今治市政の舵取りをしたことになる。日本が高度経済成長を遂げた60年代は、今治市においても港湾・道路・校舎・下水道・公営住宅などのインフラストラクチャーの整備がすすめられた。1969年には本四連絡橋公団の設置が認定され、尾道-今治ルートも、その後の紆余曲折はあるが建設にむけて歩みだした。1970年には玉川ダムが完成し、水資源開発に進展をみせた。

しかし、70年代には2度の石油危機を経験し、5期目では最も有力な地場産業のタオル産業の振興や中心商店街の活性化という、今日まで通ずる問題が顕在化してきていた。さらに、次期市長選を前に市民の間で関心をよんだ問題が、学校給食センターの新設問題である。既存の給食センターは、1964年に建設されたもので老朽化が著しくなっていた。そこで1981年3月に、市は2万1千食規模の超大型給食センター建設計画を打ち出した。これに対し、センター建設反対の広範な市民運動が今治市内に生まれた。給食センター反対の市民団体は、署名活動を背景に学校給食の自校式導入を訴えた。羽藤市政も、センター建設をいったん白紙撤回せざるを得なくなり、学校給食のあり方を再検討することになった。

こうした中、1981年末の市長選で、現職の羽藤は6選目を目指した。これ

に対し、共産党の内山が4度目の挑戦を行う。さらに、自民党県議の岡島一夫が立候補を表明した。岡島は、代議士秘書を経て1971年に県議に初当選して以降、3回連続当選中だった。保守系から羽藤・岡島の2候補が立候補を表明したため、自民党県連は候補の一本化工作に乗り出す。最後は東京の自民党本部での調整が行われた。調整は難航するが、羽藤擁立で岡島も了承したとされている。しかし、今治に帰郷後、調整内容に承服できない岡島後援者たちを前にして、岡島はあくまで立候補を表明せざるを得なくなった。岡島は、自民党を離党して無所属で立候補する道を選ぶ。自民党県連は、党員だった岡島ではなく、党友の羽藤の方を推薦することになる。

選挙戦では、2区選出の越智伊平衆院議員や今治選出の野間昶県議らが羽藤支持で動いた。今治市議の3分の2も羽藤を支援した。民社党今治総支部は、公示直前に羽藤支持を決めた。また、中央から自民党幹部の竹下登衆院議員や渡辺美智雄蔵相（当時）が応援に訪れるという一幕もあった。しかし、2区選出のもう一人の衆院議員である森清は岡島を支援し、県議の一部も岡島の応援をした。また、20年前（1962年）の市長選で羽藤に敗れた田坂も、岡島を支持した。こうして70年以来、12年ぶりの保守分裂選挙となった。12年前は羽藤が自民党推薦を得られなかったにもかかわらず、自民党推薦の山本博通を破った。今度は逆に、羽藤が自民党推薦を獲得し、得られなかった岡島とあいまみえることとなったわけである。12年前は「市民党」を名乗った羽藤が、「市民党」を名乗る岡島の挑戦を迎え撃つというめぐりあわせになったのである。

結果は1万4千票近くの差をつけての岡島の勝利であった。49歳の岡島は、県下12市の市長の中で当時最年少の市長ということになった。こうした清新なイメージを備えていた岡島に対して、78歳と高齢の羽藤には市民の間に多選批判の声が高まっていた。また、岡島が自民党推薦を得られなかったことで、かえって陣営がひきしまり、自民党支持者層以外への支持の拡大にもつながったとされている。さらに、反越智－野間といった票が岡島に流れたという。こうした要因が複合し、予想外の大差での岡島当選となった。前々回、前

回の選挙では、羽藤批判票を集め1万票以上獲得していた共産党の内山は、今回は保守分裂選挙の激戦の中に埋没する形となり、得票を大幅に減じた。投票率は、前回は30%近く上回った。

懸案だった学校給食問題に関しては、岡島は自校式を選挙中に公約していた。岡島市政によって市内の学校に徐々に自校方式が取り入れられていき、後に全国から視察に訪れる人々があらわれるような状況が生まれた⁴⁾。次に今治において市民の関心をひいた問題が、今治市の第3次港湾計画にともなう織田が浜の埋め立て問題である。今治市街から至近の距離にある織田が浜は長さ1.5kmを超える遠浅の砂浜であった。この織田が浜の3分の1を埋め立てて富田埠頭をつくり、流通・産業の拠点にしようという計画が、市からもちあがった。この計画を知った地元住民を中心に、環境保護の観点から埋め立て反対運動が組織され、市内全域に支持を広げていく。住民団体は、反対署名集め、請願、陳情を行い、ついには1984年3月に埋め立て差し止めを求めて提訴にふみきる⁵⁾。

提訴以降、織田が浜埋め立てをめぐる市当局と住民団体の対立がつづく中で、「今治織田が浜を守る会」代表の飯塚芳夫が、1986年の市長選に立候補することをきめた。飯塚は、村議の経験をもち、教員を経て当時は学習塾を経営していた。「守る会」は埋め立て反対の立場から市長選の候補者擁立をめざしたが、候補者選びは難航した。「守る会」と共産党が軸になって「明るい今治市をつくる会」がつくられ、最後には飯塚自らが立候補することになったのである。

他方、現職市長の岡島は早くから選挙準備を進め、自民推薦、公明・民社支持をとりつけた。80年代以降、各地の首長選で顕在化しはじめた自公民路線を今治でも確立して、選挙戦にのぞむことになった。また、前回市長選では羽藤支持で動いた越智伊平衆院議員も、今回は岡島を支援した。

こうして岡島－飯塚の一騎打ちとなった選挙戦だが、77歳と高齢の飯塚は立候補表明直後に持病の喘息で入院せざるを得なくなってしまう。候補者自身

が入院によって選挙戦を戦えないこともあって、選挙や埋め立て問題に対する市民の反応も飯塚陣営が期待したほどには盛り上がらなかった。選挙結果は、予想通り岡島の大勝に終わった。病をおして立候補した飯塚は、翌87年2月に逝去する。埋め立ては同年4月に着工された。裁判の方は、1988年に原告側訴えを棄却した第1審判決がなされた。最終的には、1995年7月に最高裁で上告が棄却されて住民側敗訴が確定するまで、11年にわたってつづけられた。奇しくも、最高裁判決があった同じ7月から、完成した富田埠頭の使用が開始された。

1989年の市長選では、現職の岡島は自民・民社推薦、公明支持の保守中道路線で3選に挑む。従来、森清系の色彩が強かった岡島だったが、2区選出の他の自民党衆院議員である越智伊平、村上誠一郎陣営とも友好関係をつくって万全の態勢を敷いた。この岡島の対立候補は、共産党の渡辺薫のみであった。選挙は、実質的な岡島信任投票と化し、市民の関心をひかなかった。投票率は40%台前半まで落ち込み、史上最低を記録した。その中で岡島は、渡辺の3倍近い票を獲得し圧勝した。

1993年12月の選挙でも、岡島は自民・民社推薦、公明支持に加え、労組の連合の支持も取りつけた。しかし、保守系市議のうち8名が岡島の政治姿勢を批判し、不支持を決めた。これに対し、共産党から渡辺薫が再度の挑戦。そして、岡島と同じ保守系から池田伸が立候補を表明し、12年ぶりに三つどもえの市長選となった。

池田は、1971年の県議選で岡島とともに自民党から今治市選挙区に初めて立候補し、30代で初当選をかざった。1年半後に任期途中で県議を辞任し、1972年12月の総選挙で愛媛2区に自民党公認で打って出た。しかし結果は落選だった。1991年4月の県議選に、今度は無所属で挑むが、5千票に届かぬ得票で落選した。今回の市長選には、一部の市議の支援を受け、岡島の多選批判、市政刷新を訴えての立候補だった。

共産党の渡辺は、岡島市政の大規模開発路線に対する批判を強く訴えた。実

際、安定成長の80年代前半を経てバブル経済の80年代末から90年代初めにかけて今治の行政運営を担当してきた岡島市政では、1999年春に本四連絡橋尾道-今治ルート開通を予定していたことも重なって、大型公共事業が相継いでいた。2期目の時に、すでにふれた織田が浜埋め立てに着工した他、今治駅西地区土地区画整理事業に着手した(87年7月)。さらに野間馬ハイランド(89年4月)とクアハウス今治(89年7月)が完成している。3期目の時点で、今治駅周辺鉄道高架化事業が完成し、新都市開発計画が打ち上げられた。新都市開発は本四連絡橋の開通をひかえて、西瀬戸自動車道インターチェンジ近くに新たな交流拠点形成をめざすというものである。工業・流通、住宅、大学を集積する計画で、事業費は約500億円が見込まれ(今治負担分は約200億円)、完成まで15年の歳月を費やす予定であった。さらに、市内に新図書館などの箱物の建設も計画された。

市長選は、結果的には岡島の4選であった。しかし、次点の池田とは4千票足らずの得票差で、強力な支持基盤をもたない池田の善戦を許した。岡島がおもわぬ接戦を演じるはめになった要因として、陣営内部の楽観ムードからの組織のゆるみ、市民の多選批判、新図書館(96年3月完成)の入札談合疑惑の影響などが指摘された。

岡島市政4期目は、図書館の他に総合福祉センターも完成した(97年11月)。一方で、バブル崩壊後の長期不況と経済のグローバル化の進展によりタオル産業の苦境は深まった。また、大型商業施設の郊外進出で中心商店街の衰退に拍車がかかった。岡島市政1期目の時点で12万6千人近くいた人口は、そこを頂点に減少に転じ、96年にはとうとう12万人を切った。

前回市長選で落選した池田は、1995年4月の県議選に無所属で出馬して通算2度目の当選を果たし、県議に返り咲いた。しかし、再度任期途中で辞任し、1998年1月の今治市長選に再挑戦することを明らかにした。一方、現職の岡島市長は引退を表明し、後継に今治市総務調整部長だった繁信順一を指名した。繁信は、2区選出の自民党衆院議員たちの支援の他に、社民党の支持、

えひめ民社協会、連合愛媛の推薦も受けた。さらに今治選出の3県議に、20人以上の市議が繁信の応援に回り、知名度では池田に劣るものの組織力で圧倒的な優位にたった。この両名の他に、共産党から木山隆行が立候補した。また、桜井地区から渡辺雄二が立候補したが、これは翌年4月に予定される市議選をにらんでの立候補といえた（実際、渡辺は99年、03年の今治市議選に立候補するが2回連続して落選している）。新人4人の選挙戦になったが、事実上、池田－繁信の一騎打ちといってよかった。

岡島市政の継承を唱える繁信に対し、池田は市政刷新を訴えた。しかし、組織力に勝る繁信が大差で初当選をかざった。65歳の池田に対し、51歳の繁信はイメージ的にも勝ったといわれている。2度目の敗北を喫した池田は、1999年4月の県議選に無所属で立候補し、3度目の当選を勝ちえた。任期満了まで務めた後、政界を引退している。

岡島は、従来森清系と目されてきた。しかし、その森は90年総選挙を前に引退する。一方、今治地方を地盤とする村上誠一郎が、86年総選挙での初当選以来、中選挙区制下の愛媛2区で連続3回当選し、今治に越智系とならぶ系列を築きつつあった。岡島は、この村上に近い立場をとるようになっていた。一方、岡島後継に指名された繁信は、むしろ越智系だとされている。繁信の市長選の最中も、越智系と村上系の主導権争いが行われたと言われている。

この今治市長選が行われた翌年の99年の県知事選では、現職知事の伊賀貞雪派と保守系新人の加戸守行派との2派に、県内の保守勢力が分裂して熾烈な選挙戦が展開された。この時、村上衆院議員および今治選出の自民党県議である山本順三は、加戸支持で動いた⁶⁾。一方、当時の自民党県連会長だった越智伊平と、今治選出の県議（当選5回）出身で92年から参院議員になっていた野間赳⁷⁾は伊賀支持の立場にたった。結果は、加戸が大差で伊賀を破り、初当選した⁸⁾。

このような事情から、越智に近い繁信市政と加戸県政との関係は、必ずしも良好でなかったといわれている。そもそも遡ると、羽藤市政と久松県政の時代

には県知事選を競った者同士といういきさつがあり、岡島市政と伊賀県政の間にも不和がささやかれていた⁹⁾。今治市の保守政界の中には、「保守系市長なのに、県との関係をうまくつぐれない」との思いが長年にわたって存在してきたようだ。

以上のような経緯から、2001年12月の市長選には、村上系の現職県議を推す動きが一部にみられた。しかし、結局出馬には至らなかった。また、共産党も候補者擁立を見送ったため、現職の繁信の再選が無投票で決まった。無投票当選は、田坂再選の時以来、43年ぶりであった。

1) 1945年12月に、戦後初めて行われた衆議院選挙で、愛媛選挙区（定数9、大選挙区制限連記制）より9位で初当選。

2) 愛媛県知事選挙 1951年4月30日（投票率88.72%）

当 久松 定武（無） 280,809

佐々木長治（自由） 278,168

青木 重臣（自由） 147,864

参議院議員（緑風会）だった久松は、社会党と民主党の共同推薦で立候補し、当選した。

3) 愛媛県知事選挙 1951年4月30日（投票率75.34%）

当 久松 定武（無） 393,225

羽藤 栄市（無） 239,557

4) 兩宮正子他編『学校給食を考える』青木書店、1997、P.153～154、進藤久美子『ジェンダーで読む日本政治』有斐閣、2004、P.277～279参照。

5) 織田が浜埋め立て反対運動に関しては、関礼子「自然保護運動における『自然』」『社会学評論』188、1997、参照。

6) 1995年4月の県議選で今治から選出されたもう一人の自民党県議である在間功典は、96年7月に自民党を離れ無所属になっていた。

7) 参院愛媛選挙区 1992年7月26日（投票率54.31%）

当 野間 赴（自民） 385,178

菅原 辰二（無） 163,477

佐々木 泉（共産） 52,430

その後、野間は2回目の参院議員当選を果たし、任期満了後、引退している。

参院愛媛選挙区 1998年7月12日（投票率57.22%）

当 野間 赳（自民）	306,762
泉谷 睦美（無）	192,456
谷田 慶子（共産）	93,325
日野 圭祐（自由）	48,752
宇都宮 悖（自由連合）	13,196

8) 愛媛県知事選挙 1992年7月26日（投票率63.10%）

当 加戸 守行（無）	424,394
伊賀 貞雪（無）	239,828
藤原 敏隆（無）	42,826
谷田 慶子（共産）	35,016
福岡 英二（無）	5,466

9) 「21世紀へのステップ—今治市長選を前に—1」『愛媛新聞』1998年1月5日付参照。
この不和の原因に関しては、「市長と知事との個人的な感情の問題」と述べる市議がいた。

4 小 括

愛媛県の東部（東予）は、「保守王国」愛媛の中では、比較的革新系の政党が強い地域とされてきた。東予地方は、さらに内部で今治生活圏、新居浜・西条生活圏、宇摩生活圏の三つに分けられることがある。革新政党が強いのは東予の中でも、大企業労組を抱える新居浜・西条生活圏であった。

今治は、同じ工業都市でも新居浜・西条とは異なり中小零細企業からなる地場産業中心の都市である。そのため、むしろ革新政党の社会党・共産党の勢力が弱かった。特に社会党は、国政段階で長く野党第一党の地位にあったが、今治市においては敗戦直後の市長選を除いて、独自候補を擁立することすらしなかった。人口規模が似通っている新居浜市で革新市政が成立した時期（泉敬太郎市長、1965～1984年）においても、今治で社会党・共産党の革新統一候補が生まれることはなかった。

タオルなどの地場産業が中心の今治では、工業都市であっても保守地盤が厚く、今治を主たる地盤とする自民党衆院議員が2名いることの方が、通常の状態であった。衆院選挙制度が小選挙区制になった今でも、この二系統の代議士

系列は残っているとされる。こうした今治市で市長選が活性化するのは、保守分裂選挙になった時である。保守内部での争いは、政策を競うよりもしばしば中傷合戦をうんだ。また激しい選挙戦は、下馬評を覆すような選挙結果をもたらすこともあった。前述した今治市を主たる地盤とする衆院議員が複数存在することが、こうした状況に絡むこともあった。次に、こうした保守主導の市政を下支えした議会構成の分析を行い、今治市の政治構造の特徴を明らかにしていくことにする。

付 資料

[今治市長選の選挙結果]

1947年4月5日（投票率74.74%）

当 森 秀夫（無）	9,844
越智直三郎（愛媛民主）	4,767
木原 主計（社会）	2,665

1948年11月12日（無投票）

当 山本 幸助（無）

1952年10月24日（投票率68.04%）

当 村瀬 武男（無）	12,298
山本 幸助（無）	9,395

1954年1月26日（投票率75.30%）

当 田坂敬三郎（無）	13,129
稲本 早苗（無）	6,981
山沢和三郎（無）	5,751
福島 照一（共産）	426

1958年1月22日（無投票）

当 田坂敬三郎（無）

1962年1月23日(投票率77.58%)

当 羽藤 栄一(無)	24,264
田坂敬三郎(無)	21,080
石原 吉久(共産)	1,517

1966年1月20日(投票率61.09%)

当 羽藤 栄一(無)	33,129
徳丸 俊晴(共産)	3,990
田窪 利一(無)	1,797

1970年1月14日(投票率82.77%)

当 羽藤 栄一(無)	29,407
山本 博通(自民)	20,160
村上 敏郎(無)	9,398
内山 正二(共産)	1,792

1974年1月20日(投票率70.52%)

当 羽藤 栄一(無)	39,836
内山 正二(共産)	14,677

1977年12月25日(投票率51.49%)

当 羽藤 栄一(無)	32,000
内山 正二(共産)	10,321

1981年12月27日(投票率80.44%)

当 岡島 一夫(無)	40,262
羽藤 栄一(無)	26,554
内山 正二(共産)	2,060

1986年1月12日(投票率54.96%)

当 岡島 一夫(無)	35,868
飯塚 芳夫(無)	12,037

1989年12月26日(投票率43.39%)

当 岡島 一夫(無)	28,317
渡辺 薫(共産)	9,781

1993年12月26日（投票率53.24%）

当 岡島 一夫（無）	24,079
池田 伸（無）	20,160
渡辺 薫（共産）	3,683

1998年1月18日（投票率66.83%）

当 繁信 順一（無）	36,249
池田 伸（自民）	20,701
木山 隆行（共産）	4,023
渡辺 雄二（無）	839

2001年12月16日（無投票）

当 繁信 順一（無）

2005年2月22日（投票率75.76%）

当 越智 忍（無）	47,250
白石 哲朗（無）	40,226
堀内 琢郎（無）	11,352
徳永 安清（無）	9,702

【戦後の衆議院愛媛2区の選挙結果】 *括弧内は今治市における得票

第23回 1947年4月25日

当 赤松 明勅（社会）	45,878	（1,350）
当 村瀬 宜親（民主）	31,607	（6,476）
当 馬越 晃（民主）	29,265	（4,624）
村田 哲雄（社会）	26,119	（2,273）
小西 英雄（自由）	24,174	（ 464）
石川 芳男（民主）	23,721	（ 285）
神野 佐平（民主）	5,864	（ 65）
飯塚 芳夫（共産）	4,830	（ 852）
内田 次男（無）	472	

第24回 1949年1月23日

当	村瀬 宜親 (民主)	30,919	(6,289)
当	小西 英雄 (民自)	29,006	(455)
当	越智 茂 (民自)	27,387	(3,895)
	馬越 晃 (民主)	26,691	(5,472)
	宮崎 忠義 (社会)	24,776	(550)
	村田 哲雄 (社会)	17,184	(855)
	赤松 明勅 (社会)	17,100	(505)
	松本新八郎 (共産)	15,165	(1,765)
	三島 安精 (無)	9,852	(794)
	石川 糾 (無)	8,676	(229)

第25回 1952年10月1日 (投票率76.66%)

当	安平 鹿一 (左社)	50,934	(2,429)
当	砂田 重政 (自由)	47,266	(4,732)
当	越智 茂 (自由)	44,218	(5,738)
	村瀬 宜親 (改進)	31,648	(5,637)
	小西 英雄 (自由)	29,751	(482)
	宮崎 忠義 (右社)	25,799	(690)
	宇都宮周策 (共産)	4,561	(559)

第26回 1953年4月19日 (投票率75.13%)

当	安平 鹿一 (左社)	58,575	(2,831)
当	越智 茂 (自由)	53,103	(6,769)
当	村瀬 宜親 (改進)	47,643	(8,205)
	砂田 重政 (自由)	40,893	(7,513)
	小西 英雄 (自由)	24,861	(156)
	門屋 功 (共産)	3,226	(350)

第27回 1955年2月27日 (投票率74.11%)

当	砂田 重政 (民主)	75,833	(19,184)
当	安平 鹿一 (左社)	54,732	(4,373)
当	越智 茂 (自由)	50,217	(7,257)
	村瀬 宜親 (民主)	40,046	(10,807)
	村田 哲雄 (無)	7,503	(394)
	清水 省三 (共産)	3,063	(426)

補欠	1958年2月9日	(投票率76.38%)		
当	羽藤 栄市	(社会)	73,519	(12,130)
当	井原 岸高	(自民)	66,971	(4,057)
	村瀬 宜親	(自民)	57,018	(17,007)
	八木 徹雄	(自民)	45,094	(11,973)
	元岡 稔	(共産)	2,151	
	肥後 亨	(諸派)	399	

第28回	1958年5月22日	(投票率82.98%)		
当	村瀬 宜親	(自民)	62,706	(19,474)
当	井原 岸高	(自民)	58,328	(2,380)
当	八木 徹雄	(自民)	51,457	(13,448)
	羽藤 栄市	(社会)	49,651	(12,487)
	安平 鹿一	(社会)	44,642	(766)
	元岡 稔	(共産)	1,696	

第29回	1960年11月20日	(投票率81.87%)		
当	安平 鹿一	(社会)	63,577	(3,479)
当	八木 徹雄	(自民)	57,271	(14,096)
当	井原 岸高	(自民)	53,225	(2,271)
	村瀬 宜親	(自民)	48,345	(15,696)
	羽藤 栄市	(社会)	42,974	(12,728)
	元岡 稔	(共産)	3,267	(569)

第30回	1963年11月21日	(投票率79.89%)		
当	藤田 高敏	(社会)	64,232	(4,004)
当	八木 徹雄	(自民)	63,815	(18,335)
当	井原 岸高	(自民)	56,894	(2,187)
	村瀬 宜親	(自民)	53,612	(20,255)
	曾我部正雄	(社会)	22,191	(3,340)
	元岡 稔	(共産)	5,548	(1,025)
	津島 宗康	(無)	555	

第31回	1967年1月29日	(投票率81.72%)		
当	村上信二郎	(自民)	74,899	(21,695)
当	八木 徹雄	(自民)	67,663	(21,137)
当	井原 岸高	(自民)	63,753	(3,046)
	藤田 高敏	(社会)	60,005	(5,895)
	秋川 保親	(共産)	7,872	(1,298)
第32回	1969年12月27日	(投票率79.08%)		
当	藤田 高敏	(社会)	78,080	(8,962)
当	村上信二郎	(自民)	77,601	(20,314)
当	八木 徹雄	(自民)	64,032	(22,247)
	井原 岸高	(自民)	56,029	(2,935)
	秋川 保親	(共産)	7,255	(1,657)
	井川 智隆	(無)	595	(135)
補欠	1972年10月8日	(投票率62.59%)		
当	越智 伊平	(自民)	64,032	(32,884)
当	井原 岸高	(自民)	56,029	(3,295)
	村上 豊司	(無)	36,737	(7,037)
第33回	1972年12月10日	(投票率78.08%)		
当	越智 伊平	(自民)	70,661	(26,380)
当	井原 岸高	(自民)	67,842	(3,134)
当	藤田 高敏	(社会)	63,986	(8,032)
	森 清	(無)	41,329	(2,783)
	池田 伸	(自民)	35,214	(16,216)
	秋川 保親	(共産)	12,630	(3,153)
	井川 智隆	(無)	466	(66)
第34回	1976年12月5日	(投票率82.45%)		
当	越智 伊平	(自民)	77,764	(27,498)
当	森 清	(自民)	74,100	(12,334)
当	藤田 高敏	(社会)	68,454	(9,702)
	井原 岸高	(自民)	58,650	(3,103)
	福家誠二郎	(公明)	26,780	(5,980)
	木山 隆行	(共産)	13,566	(5,459)

第 35 回	1979 年 10 月 7 日	(投票率 76.63%)		
	当	越智 伊平 (自民)	76,579	(25,913)
	当	井原 岸高 (自民)	73,869	(5,867)
	当	藤田 高敏 (社会)	68,328	(9,886)
		森 清 (自民)	68,317	(11,873)
		木山 隆行 (共産)	12,306	(4,931)
		井川 智隆 (無)	828	(221)
第 36 回	1980 年 6 月 22 日	(投票率 80.58%)		
	当	藤田 高敏 (社会)	84,009	(12,484)
	当	森 清 (自民)	80,449	(15,746)
	当	越智 伊平 (自民)	73,065	(26,463)
		井原 岸高 (自民)	64,012	(5,189)
		木山 隆行 (共産)	10,743	(4,077)
		井川 智隆 (無)	775	(181)
第 37 回	1983 年 12 月 18 日	(投票率 76.32%)		
	当	越智 伊平 (自民)	78,695	(26,731)
	当	藤田 高敏 (社会)	65,174	(9,398)
	当	森 清 (自民)	59,174	(9,684)
		村上誠一郎 (無)	51,423	(15,296)
		井原 岸高 (自民)	42,354	(2,487)
		大河内一郎 (共産)	8,614	(2,208)
第 38 回	1986 年 7 月 6 日	(投票率 78.96%)		
	当	越智 伊平 (自民)	79,795	(22,920)
	当	村上誠一郎 (自民)	79,171	(22,039)
	当	森 清 (自民)	77,963	(10,150)
		藤田 高敏 (社会)	70,259	(9,696)
		大河内一郎 (共産)	8,599	(2,179)

第39回 1990年2月18日 (投票率 77.51%)

当 藤田 高敏 (社会)	97,641	(16,377)
当 越智 伊平 (自民)	83,920	(24,532)
当 村上誠一郎 (自民)	64,084	(17,916)
小野 晋也 (自民)	61,644	(4,930)
大河内一郎 (共産)	8,710	(2,295)

第40回 1993年7月18日 (投票率 72.18%)

当 越智 伊平 (自民)	79,878	(23,530)
当 村上誠一郎 (自民)	72,924	(20,206)
当 小野 晋也 (自民)	68,893	(5,707)
藤田 高敏 (社会)	66,789	(10,964)
平本 哲郎 (共産)	9,979	(2,633)

[小選挙区比例代表並立制] ~新愛媛2区

第41回 1996年10月20日 (投票率 61.11%)

当 村上誠一郎 (自民)	118,966	(32,528)
梅崎 雪男 (社会)	27,060	(6,786)
谷田 慶子 (共産)	23,143	(8,620)

* 比例代表四国ブロックで、越智伊平 (自民) が当選

第42回 2000年6月25日 (投票率 62.30%)

当 村上誠一郎 (自民)	113,616	(28,408)
梅崎 雪男 (社会)	42,673	(12,443)
秋山 勝美 (共産)	20,952	(8,435)

第43回 2003年11月9日 (投票率 62.30%)

当 村上誠一郎 (自民)	99,208	(25,037)
齊藤 政光 (民主)	43,553	(13,218)
梅崎 雪男 (社会)	15,150	(3,810)
田中 克彦 (共産)	12,206	(4,642)

* 本稿は2002年度松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。

** 本稿のための資料収集の過程で、松山大学人文学部社会学科の学生である清水正則君の助力を得た。感謝したい。